

委任統治期パレスチナにおけるワタンの発見

「ハリール・サカーキーニー日記」に見る〈旅〉

田浪亜央江

I. はじめに

1932年、54歳のハリール・サカーキーニーは、アメリカにいる息子サリーに向けた手紙の中で次のように書いている。「この国に生まれてから長く過ぎたが、“我はこのともがらと暮らす者に非ず”とムタナッビーの言うごとく、異邦人としてここに暮らしてきた。(……) 日々を重ねながらもこの考えに囚われている。果たして自分の国で異邦人だと感じる者の人生とは？」[YKS-1, 1932/3/19, 202]¹。

しかしその2年後、サカーキーニーは「異邦人として暮らし」てきたはずのパレスチナに一区画の土地を買い、そこに簡素なマイホームを建てることを計画する。自分がその国の住民だとは思えないような違和感、疎外感を持った人間が全財産を費やし、〈終の棲家〉の建設を決意した背後には、一体何があったのだろうか。彼と「この国」との関係は、上記の手紙を書いたのち、どのように変わったのだろうか。

ハリール・サカーキーニー(1878 - 1953)は、エルサレムの旧市街に生まれ、オスマン帝国治政下および英国委任統治下のパレスチナで活躍した、名高い文化人・教育者であり社会活動家である²。父方の祖母はイスタンブール出身のギリシャ人で、父親はエルサレムのギリシャ正教コミュニティのムフタール³をしていた。いくつかの学校で学んだのちに教員となり、エルサレムの文化人・知識人と旺盛に交流しながら知的な鍛錬を続け、

¹ 以下、「サカーキーニー日記」からの引用はYKSと記し、巻数、日付、頁数を順に付す。

² サカーキーニーの名前はまた、1996年にラーマッラーに設立された「ハリール・サカーキーニー文化センター」に残されている。このセンターはパレスチナに数ある「文化センター」のなかでも老舗の一つであり、1947年から1951年までラーマッラーの市長を務めたハリール・サーレム・サーレフの所有していた建物を拠点としている。サカーキーニーとの直接的なつながりは特になにも関わらずその名前がつけられたことで、パレスチナ社会におけるサカーキーニーの位置づけが伺えよう。なお、日記の刊行元もこの文化センターであるが、資金については複数の財団からの助成を得ている。

³ ムフタールとは、伝統的に共同体構成員の合議によって選ばれる、コミュニティの代表であり問題事の調停などを行う世話役である。一人ではなく複数の場合もある。なお、サカーキーニー自身は1910年代にギリシャ正教コミュニティの改革運動に関わったのち、教会とは距離を置くようになった。

文化的に豊かな青年時代を送ったようだ。アメリカから帰国後の 1909 年、体罰を厳禁し試験を行わずに生徒の自己評価に委ねるといふ、当時としては画期的な教育方針をもつ「ドゥストゥーリーヤ学院」をエルサレムに設立した。アラブナショナリストでありつつ、ストイックな生活スタイルを作り独自の信条を生み出し、東西の思想をエネルギーに吸収した万能型の教養人であった。

彼が残した日記と書簡類は、8 巻におよぶ書籍としてまとめられ、2003 年から 2010 年にかけてパレスチナで刊行された⁴。それは彼個人の思想や足跡を知る手掛かりとしてだけでなく、当時のパレスチナ社会や文化のありように関する貴重な資料となっている。

膨大な日記が存在するおかげで、サカーキーニーの生涯については比較的詳細に知られており、関連する研究も多い。オスマン朝末期から委任統治期を通じて、彼の日記や手紙ほど詳細な個人的記録はほかに見当たらない。ただしサカーキーニーの日記で注目されているのはその前半部分のオスマン末期から英国の軍政時代であり、後半部分、とりわけパレスチナ委任統治体制が表面的には比較的平穏に推移していた 1930 年代前半について取り上げている研究は少ない。本稿ではこの時期にサカーキーニーが息子に書き送った手紙を読み、とくに当時彼が頻繁に行った〈旅〉に注目する。「私はパレスチナのあらゆる平原と山々、町、村を知った。夏も秋も冬も春も、何度も歩いた」[YKS-6, 1935/4/9, 70] と述べる通り、パレスチナ中をくまなく歩きまわった旅のなかで彼が「ワタン الوطن (祖国／郷土)」を発見したとの仮説を立てるなら、それはいつ・どのような状況においてであったのだろうか。

II. サカーキーニーの 1920～1930 年代

1919 年、ハリール・サカーキーニーはエルサレムの教員養成学校の校長に就任したが、翌年 7 月 1 日、ユダヤ人のハーバート・サミュエルが高等弁務官に就任すると⁵、抗議の意を表明するためにその職を辞任した。翌月にはカイロのウバイディーヤ学院の校長として招聘され一家でエジプトに移り、ターハー・フサインらエジプト人文学者と親交を得る。しかしカイロの埃っぽい空気が息子サリーの健康に有害だと判断すると 1922 年にエルサレムに戻り、時間の融通の利く気ままな一時期を過ごす。このかん 24 年までアラブ・ナショナリズムを志向する団体「アラブ・クラブ」の事務局長を務め⁶、同年ヘブライ

⁴ すでに 1955 年の段階で、日記の一部が刊行され、1990 年にヘブライ語訳が刊行された。

⁵ 1920 年 7 月 1 日、サン・レモ会議を受けて英国が一方的にパレスチナの委任統治宣言を行い、高等弁務官が置かれて民政が開始された。国連が正式に委任統治を承認するのは 1922 年 7 月 24 日である。

⁶ この時期のサカーキーニーについては [Moed2014]、[Tamari2003]。

大学開校式でアーサー・バルフォアが出席したさいには、アクサー・モスクの説教壇で抗議のスピーチを行なって勇名を馳せた。この騒ぎの翌年、サミュエルからロード・ブラマーへと高等弁務官が変わり、サカーキーニーはパレスチナの教育監督官に任命される。家庭生活では、1923年6月2日に、サリーと10歳離れて長女ドゥミヤが生まれ、翌年6月7日に次女のハーラが生まれている。

サカーキーニーは53歳から59歳までの時期、アメリカ留学中のサリーに宛てて熱心に手紙を書いた。以下で扱う1930年代のサカーキーニーの生活状況は、この手紙を通じて知られるものである。息子に対する生活や勉学へのアドバイスを与える一方で、一家の生活の様子や自分の仕事の内容を彼はこと細かく報告している。

1931年9月3日、アメリカに着いたサリーからの手紙への返信として書かれた手紙が、その最初のものとなった。サカーキーニーはこの父と子の書簡を将来発表することを明確に意識しており、まもなくサリーからの手紙を保管するためのファイルを購入したことを報告している。そして息子に対しては、文字を書くのは便箋の片面だけにすること、穴を空けてもいいように端には文字を書かないこと、保存のために良い紙を使うこと、などの細かい注文をつけている [YKS-4, 1931/9/26, 40]。しだいにサリーからの手紙の間隔が広がり始めるなか、もっと頻繁に書くようにとの指示が繰り返される。息子への態度は一貫して彼への信頼に裏づけられたもので、成績のふるわない教科についての報告を受けてもまったく動揺を見せない⁷。

1926年、48歳で教育監督官に任命されてからのサカーキーニーは、各地にある学校への視察のためにパレスチナ中を移動することを日常とするようになっていた。エルサレムの近郊の学校を訪問する場合は日帰りだが、ガザやガリラヤ地方など遠方への訪問の場合は2、3日の宿泊を要するものだった。さまざまな訪問先の中で、サカーキーニーが唯一不満をもらった場所はガザである。菜食と毎朝の冷水でのシャワーという生活習慣にこだわりをもっていたサカーキーニーはガザについて、「必要とする食べ物やシャワーのある宿がない」 [ibid., 1932/2/16, 177]、「あそこのホテルほどひどいホテルを知らない」 [YKS-5, 1933/11/28, 188] と、嫌悪感を隠さない。他方、彼に尽きぬ興味を与えるのは、ガリラヤ地方の景観だった。この地方への出張は、家族旅行を兼ねる場合もあった。

この時期ようやく経済上の安定を得、40代半ばで生まれた小さな娘二人を抱えながらパレスチナのあちこちに足を運ぶ毎日は、サカーキーニーの人生のなかでもっとも穏や

⁷ 1932年4月、サカーキーニーは、サリーが学校を停学となり、全学費を前納するという条件つきで復学が認められるという知らせを受ける。ここで分かるのは、サリーは過去パレスチナで二度退学しているなど、なかなかの問題児だったということである。サカーキーニーの教育方針を批判する周囲の者もあり、サカーキーニーもそれを気にはしていた。 [YKS-4, 1932/4/2, 212-3]

かな日々であったと考えられる。だが、ユダヤ移民の増加に由来するトラブルに関する報道や、1933年、1936年のパレスチナ全土のゼネストのなかで、パレスチナの将来への不安も見え隠れする。そうした背景のなかで、パレスチナの光景の見え方はおのずから変化してゆくのである。

III. パレスチナ北部への家族旅行

1932年3月のパレスチナ北部への旅は、サカーキーニーにとって初めての本格的な家族旅行だった。この地域の学校視察も兼ねつつ、まだパレスチナ北部に足を運んだことのなかった妻スルターナと二人の娘にそれを経験させると同時に、当時7歳の次女ハーラのチフス快気祝いの意味も込めていた。それまでにもハイファやヤーファなどの訪問先からサリー宛の手紙を書いていたが、滞在先での出来事を時系列に詳しく書き送ったのもこれが初めてのことだった。

元イスラエル国防軍将校という経歴をもつ平和活動家であり著名な文学者でもあるマトゥティヤフ・ペレドは、若き日のサカーキーニーがニューヨークから恋人だったスルターナに宛て望郷と恋慕の思いを書き送った手紙が「パレスチナ文学の遺産」の一つとして見なされるべきだと述べている [Peled 1982, 146]。そうであるならば、委任統治下でサカーキーニーが手紙のかたちで書いた旅行記も、そのように呼ばれるに相応しい。訪問の印象が鮮明に残るタイミングで、多忙な合間に言葉を選び要所をおさえて彼が書き残した記録は、当時のパレスチナの自然や景観を今日に生き生きと伝えている。

一家はまずナザレに向かった。サカーキーニーは頭に壺を載せて運ぶ少女たちを見て、その母を処女マリアのイメージに重ね、路上で遊ぶ子どもたちから「ナザレのイエスが彼らと共に遊んでいるように」感じるとる [YKS-4, 1932/3/22, 205]。これまでも何度か訪問しているナザレは、初めて妻子を伴って来たという状況と息子への教育的配慮のなかで、この町の日常生活を共有しない旅人の視線によって言語化されている。

さらにターブール山⁸に車で登ると、山上には「古くてみすばらしい」ギリシャ正教の修道院と「パレスチナでもっとも壮麗な」ラテン教会の修道院があり、それぞれを訪ね

⁸ 日本語では一般に、タボール山またはタボル山と表記。マルジュ・イブシ・アーメル平原のなかにぽっかりと浮かび立つ標高約580メートルの山で、イエスの「山上の変容」が起きた場所との伝説がある。「六日の後、イエスは、ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。イエスの姿が目の前で変わり、服は真っ白に輝き、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった」[マルコによる福音書 9:2-3]

ると、外観の違い以上に興味深い対比に気づかされた。ラテン修道院にはイタリア人、フランス人、ドイツ人などの修道士がいたが、サカーキーニーの一行に女性がいたことから対面を避けられ、立ち入りを断られる。一方正教会の修道士は挨拶にやって来るとサカーキーニーらと同席し、コーヒーやパン、卵、オリーブなどでもてなしてくれた。

さあ、もしもイエスがこの山頂に来たら、どちらの修道院を好むだろうか？彼は家庭的な正教の修道院の客として立ち寄ることを好み、自分のパンやオリーブや水を分かち合ったに違いない。そして彼はきっと、ラテン修道院に抗議したことだろう、人工的な装飾で山頂の美を汚したのだから。彼らの修道院は、まるで古い服に新しい布で継ぎ当てをしたかのようだ。[ibid., 1932/3/22, 206]

状況は全く異なるものの、サカーキーニーの人生について知る者ならばおそらく誰もが、ここでアラブ社会における〈もてなし〉や庇護の伝統に関するサカーキーニーの強烈な思い入れについて知らされた手記のことを思い出すだろう。1917年11月下旬、39歳のサカーキーニーが知人のユダヤ人オルター・レヴィンを当局から匿ったさいの心情を記した手記である。第一次大戦末期の当時、オスマン政府はアメリカ合衆国が協商国側で参戦したことを受けて全在留アメリカ人に出頭命令を出したが、アメリカ国籍をもつレヴィンはそれに従わずに逃亡し、庇護を求めてサカーキーニーの家の戸口に立った⁹。避難者を受け入れる「規範」を幼少期から身につけていたサカーキーニーは、その規範を彼に与えた共同体の名にかけてレヴィンを受け入れたのである。「彼（レヴィン）は自身そう考えているようにハリール・サカーキーニーのもとに避難したのではなく、誰彼に関わらず属するウンマ・アラビーヤ〔アラブ共同体〕のなかに避難したのだ」[YKS-2, 370]¹⁰。

15年後、家族とともに休暇を楽しむサカーキーニーからは、こうした一途なアラブナショナリストの面影は消えている。だが、〈もてなし〉／庇護の実践が彼自身の生活や人生そのものに多大な影響を与え、後年もことあるごとに想起したことは確かであり、こ

⁹ レヴィンを自宅に匿った結果、サカーキーニーはオスマン当局にとらわれ、ダマスカスの監獄に送られて獄中で一か月近くを過ごすことになった。このかんの経緯については、[Manna' 2004]。

¹⁰ 1914年11月3日、1917年12月1日および20日の日記に基づき後日まとめられた手記で、執筆日時は不明。

うした記憶を喚起させうる出来事がイエスの「山上の変容」で名高いターブル山頂に立ったサカーキーニーに現れたことは、一種の符牒のようにではないか。サカーキーニーは続いて、この山に現れたと言われるキリストに言及しながら「山頂に立つと空は間近で、指先で触れそうだと、非日常的な経験を語る。ここに見られるのは異国を旅する外国人の視線であり、とりわけパレスチナにおいては、聖書の記述を現実の中に見出そうとする西欧の訪問者の視線である。

次にタバリアに向かった一家は、まずガリラヤ湖畔の温泉に向かう。「お前のお母さんと妹たちは、指を湯に浸け、どうして温かいの？と驚嘆した。誰が沸かしているの？この山の奥には誰が住んでいるの？消えないで燃えている火は何？燃料は？と」。このように妻子の反応を書き記すサカーキーニー自身、「この山は驚異的だ、表面は天国で、中は地獄の業火だ。……最も驚くべきは、まるで水面に浮かぶ松明のように、この美しい湖のすぐ脇にあることだ」と記す。「ほかのどんな国に、こんなことがあろう」[YKS-4, 1932/3/25, 207]。ここでは上述のような宗教的感覚とは全く別の次元で、パレスチナの地の自然の生み出す驚異に彼がすっかり虜になっている様子が伺える。

サカーキーニーを驚かせる出来事はさらに続く。当時タバリア湖畔で遊覧飛行を行っていた水上機が存在に偶然気づき、妻子を待たせて運行時刻直前に乗り込んだ彼は、「飛行機に乗りたいたいというずっと以前からの望み」をここでかなえたのである¹¹。この旅は「驚きと不思議なことの連続だった」と興奮気味に伝えたあと、同じ日に二度目となる手紙では、飛行体験から得たインスピレーションをもとに、地上高く上昇し地上から離れてゆく自分の視界のありようを想像の赴くままに描き出している [ibid., 208-9]。

IV. レバノンの光景への賛美

それから4ヶ月後の1932年7月、サカーキーニーは生涯で初めてレバノン山地を訪問した¹²。本来の計画では、ハイファに立ち寄り妹夫婦に娘二人を預け、夫婦でレバノンに向かう予定だったが、次女のハーラが体調を壊したため、単独でのレバノン訪問となった。今回の旅は、前述のパレスチナ北部の旅のように、驚異的な出来事や変わった体験

¹¹ ガリラヤ湖での水上機の遊覧飛行は、1931年10月、英国インペリアル航空によって開始されたようである [Matson (G. Eric and Edith) Photograph Collection, Library of Congress]。

¹² オスマン帝国治下での「レバノン山岳県」は他の地域を含み込んでフランス委任統治領「大レバノン」となったが、サカーキーニーの記述では、「大レバノン」という呼称は使われていない。

ではなく、ただレバノン山地の光景だけが彼を感動させる。

この旅は、サカーキーニーがバイルート・アメリカン大学に招聘されたことで実現したようだ。彼は7月27日に同大学でアラビア語教育に関する講演を行ない、文学部の学部長から絶賛されたことを記している [ibid., 1932/7/28, 296]。19日にエルサレムを出て、少なくとも8月1日まではレバノンにおり、バイルート南東約17キロの地点にあるスーク・アル＝ガルブに滞在している。この町でも講演を行ない、「スーク・アル＝ガルブの住民と避暑客が大勢招かれ」ていたという [ibid., 1932/7/30, 299]。

アレイ、ブハムドゥーン、ナバウ・アル＝サファー等、サカーキーニーはレバノン山脈中のリゾート地を精力的にまわる。なかでも彼のレバノン訪問の全印象を決定づけたのは、宿のあったスーク・アル＝ガルブだろう。バイルートの南端に接するガルブ地方の文字通りスーク（市場）であったこの町は、いくつかのミッション系の学校の存在でも知られてきた¹³。

日々あちこちを訪問したサカーキーニーは、レバノンを絶賛する手紙を息子に送る。「もし人間がこの世界で、その風土に合った好きな地域（إقليم）を選べるなら、私はレバノン人であることを選ぶ」 [ibid., 1932/7/21, 294]。ここで言われるのは国民としての「レバノン人」ではあるまい。「この山脈でつつましく農民として暮らしたいと感じた。都市のやかましさを害毒から離れ、美しい光景と澄んだ無尽蔵の空気を味わいながら、土地で働き、そこから生計を得て暮らしたいと」 [ibid.]。都市エルサレムで生まれ育ったサカーキーニーが憧れた、豊かな自然のなかで土地に根差したライフスタイルをもつ農民こそが「レバノン人」であった。

「数多くの旅をし、さまざまな見聞をし、さながら天国から天国へと移動してきた私であるが、ここでの日々はこの人生のなかでももっとも美しいものの一つだった。……この日々は私にとって10年間の価値がある」 [ibid., 1932/7/26, 295]。さらにその5日後、「昨日はレバノンで過ごした最も美しい日だった」と書く [ibid., 1932/8/1, 300]。この日

¹³ 妻子を伴った翌年のレバノン再訪でもスーク・アル＝ガルブが滞在先となっている。娘のハーラは後年の手記で、この町で滞在したホテルについて次のように述べている。「大勢のエジプト人家族やイラク人家族がいて、私たちはその子どもとすぐに仲良くなった。ホテルで出る食事は素晴らしく、最高の気分にしてくれた。若者も老人も楽しみ、雰囲気は陽気だった。有名なレバノン人独唱歌手オマル・ズィイニーが公演する夜もあり、表現力あふれる彼の歌声をその夏何度か聴いた」 [Sakakini H. 1987 37]。スーク・アル＝ガルブはレバノン内戦中の戦闘の舞台となり、特に1989年8月の戦闘によって破壊されて以来、往時の繁栄は現在跡形もない。内戦前のこの町については 2000. 2000.

は名高いローマ遺跡のあるバアル・ベックで過ごした後、午後は当時高名な教授だったシャハーダ・シャハーダをザフラに訪問した。サカーキーニーは同人が口にした言葉をこう記録する。「神の創り給うたなかでもっとも美しい国はかつてのオスマンであり、その中で最も美しい部分はシリアであり、シリアのなかで最も美しい部分はレバノンであり、そのなかで一番美しい村はザフラであり、ザフラで最も美しい家は彼（シャハーダ）の家である」。

フランスがこの地の委任統治を開始し、歴史的シリアから切り離した大レバノン国 دولة لبنان الكبير が 1920 年 9 月に宣言されてから 12 年が過ぎているが、レバノンはなおシリアの一部であるという人々の意識が、そのまま反映されている。

「私はたくさんの国を訪問し、魅力的なワーディーや山や川や湖や泉や光景を見てきたが、この山の美しさや壮麗さに匹敵するものは、私であれ誰であれ、いまだかつて目にしたことがないものだ」 [ibid.]。スルターナと一緒にあればこの旅はさらに素晴らしかったはずだと断言し、遠からぬうちに必ず彼女を連れて再訪することを誓う [ibid., 1932/7/26, 296]。

レバノン山脈の絶景だけでなく、政治的混乱を見せ始めていた当時のパレスチナに住む者がレバノンを訪問するという条件下でこそ、この尋常ならざる賛美が生まれたはずだ。委任統治期のパレスチナ人によるレバノンに対する同様の賛美は、ワーシフ・ジャウハリーヤ (1897 - 1973)、ニコラー・ズィヤーダ (1907 - 2006) の回想記にも見られる [2005 جهورية [زينة]。シャーム地方として共通の歴史や文化圏に属した長い歴史の記憶に加え、一つの国として統合された独立を求めた運動がパレスチナで盛り上がったのは、つい 10 年あまり前のことだった。

1933 年 7 月 31 日、サカーキーニーは前年の誓いを実行すべく、妻スルターナに加え、2 人の娘とともにレバノン旅行を果たす。家族を伴った賑やかな旅行ということもあってか、前年のように陶醉したレバノン賛美の表現はほとんど見られず、冗談めかしながら出費の多さを嘆いてみせる。そして 2 週間後に吐露するのは、「家が恋しい。山に登ったりワーディーを下ったりするのはもう十分だ」との心境であった [YKS-5, 1933/8/15, 146]。

V. パレスチナの光景の再発見

二度目のレバノン旅行からサカーキーニーが戻った直後、パレスチナは「戦争状態」

に突入する。1933年10月28日の暴動が起き、各地にデモとストライキが広がったのだ。8日後に一部の政治犯が釈放され、新聞の検閲を取り消すとの当局の発表によって嵐は収まるが、この後パレスチナ社会は不穏なムードに包まれる。

一方サカーキーニーは翌年2月、この年に自分が6ヶ月の長期休暇を取る資格を得たことに気がつく。そこで渡米して3年になるサリーとのあいだで、一家でアメリカのサリーを訪ねるか、サリーがエルサレムに一時帰国するかという選択肢を話し合う。サリーはサカーキーニーに諫められるほどこの計画に夢中になったようだが、何度かのやり取りの中で、サカーキーニーの筆のほうはトーンダウンしてゆく。費用が掛かりすぎるといのがその理由で、パレスチナに自分の土地を購入するという別の考えが同時期に浮上したのである。土地購入費が2回の家族旅行費と同等であることを見積もり、その費用を節約することで「退職後に落ち着ける、つつましい家を建てるための土地を買う」という意思表示をするのである [ibid. 1934/4/19, 271]。引退後を見据えてマイホームの建設を考えるという自然な流れのなかで、サカーキーニーは結果的に、パレスチナの外に出てさらに新しい知見を得ることよりも、パレスチナでの落ち着いた生活を優先したことになる。

1934年の夏休み、彼はどこにも旅をすることなく、執筆の傍ら最適の土地探しに明け暮れる。「土地購入が、今や現実的になってきた」 [ibid. 1934/10/11, 361]。10月27日にはエルサレムのカタモン地区¹⁴の土地について触れ、12月20日、土地の持ち主と基本的な合意が出来たことを伝える。この後本格的な値段交渉や支払い交渉、契約に関する話題について時おり言及し、サカーキーニーが土地の登記手続きを済ませたとの報告を息子に行うのは、1935年6月8日のことであった。

とはいえ旅することをやめたわけではなく、1935年の年明けすぐに一家でカイロを訪問し、エルサレムで味わったことのない生活のスピードの速さと騒音に戸惑いながらも、楽しく賑やかな時間を過ごす。さらに同年2月、「ハネムーン」と称して妻スルターナと二人だけで再びパレスチナ北部へ複数回旅行している。「われわれの結婚から23年が過ぎたが、まるで昨日結婚したかのようなようだ」と惚気とも取れる表現をしながら、タバリヤからサファドへの旅の様子を伝えている。

¹⁴ 現在の西エルサレムに位置する地区。英国委任統治時代に新興住宅地として開発された。イスラエル建国後、オフィシャルな名称はヘブライ語の「ゴーネン」に変更されたが、現在でもカタモンのほうがよく通用する。

「タバリヤの美しさ！目はあちこちを気ままに動き、少しも休もうとしない。むしろ人生の一瞬の楽しさも逃さないよう目をつぶらず、ずっと目覚めていても飽きることがない。……春にタバリヤ湖畔に佇む者は、天国に降り立ったようなものだ」[YKS-6, 1935/2/21, 47]。「一面の麗しく美しい新緑に、雪の覆うヘルモン山がそそり立つ。われわれのあいだにはただ、『見てくれ、何と美しい自然だろう』『ほら見ろ、山が雪をかぶっている！』『見なさい、山の緑のなかの湖の青さ！』といった言葉しかなかった」[ibid. 1935/2/28, 49]。すでにレバノンの光景は忘れ去ったかのように、サカーキーニーは何度も見てきたはずのパレスチナの光景に回帰する。

2年半前のレバノン訪問で、パレスチナ社会から離れた場所から光景そのものに心を奪われ賛美を惜しまなかったサカーキーニーは、それ以前は何気ない日常の光景として捉えていたパレスチナの山々の稜線、湖の深い碧色を、堪能し賛美すべき対象としてこの時「再発見」したのである。

4月にはやはりスルターナと二人、ナザレ近郊のサフーリヤを訪れ、こんな感慨をもちます。

パレスチナを歩くたびにその価値の高さについて知る。それを世界中の金でもって買ったとしても、利益が出るだろう。それを世界中の金でもって売ったとしても、損をするだろう。あらゆる土地にはそれを代替する場所があるが、パレスチナにはそれがない。……世界のあらゆる地にあるのは土地そのものだが、パレスチナにあるのはただ、魅力的な魔法の光景なのだ。[ibid., 1935/4/4, 67]

彼がこのようにパレスチナのかけがえのなさを強調する背景には、シオニストによる土地買収への危機感があった。「危険なのは、アラブが売り続け、ユダヤ人が買い続けていることだ。私はユダヤ人が避難所をもち、彼らがそこに避難して暮らすことを憎むのではない。彼ら以外の者たちの崩壊の上に彼らが自分たちの存在を打ち立てようとすることを憎むのだ」[ibid.]。こうした状況のなかで、「はじめに」に記したようにサカーキーニーがかつてパレスチナ社会のなかで感じていた閉塞感は影をひそめる。「神よ、パレスチナをその住民のために守り給え」[ibid., 1935/4/9, 70]。パレスチナの美しさ、かけがえのなさは、この地が脅かされているという現実のなかでいっそう鮮明になったのである。

オスマン末期の1907年、若き日のサカーキーニーは移住も視野に入れつつニューヨークに渡ったものの、安定した仕事を得られず失意のなかで喘ぎ続けた。そしてわずか9か月後に帰国を決意すると、アメリカ社会の優れた点を認めながらも「この国はワタンであるには値しない」と、苦い思いを手帳に記すしかなかった [YKS-1, 1908/7/24, 271]。アメリカを永住の地と思い定め、その社会のなかで位置を占めるために奮闘するに足る国だとは思えなかったのである。一方、その翌日の7月25日、オスマン国家が憲政を復活させたという知らせをニューヨークで受けとると、それはあたかも運命的な啓示のように彼の目に映った。彼の帰国は不意に、必然的に新たな意味を付与されたのである。「今なら国のために働ける。今なら学校や新聞、若者のための団体を設立できる。今なら制約なしで声を上げられる」 [YKS-1, 1908/7/25, 271]。パレスチナという領域的実体のなかった当時、異国での祖国の呼び名は「シリア」であったが、そこはにわかに「ワタン」として立ち上がった¹⁵。「ワタン」という言葉は直接使われていないものの、展望を見出せず恋人をおいて離れ去った祖国は、いまやその社会の有機的な一員でありたいと願い、現実的な見通しとしてそのことを語れる場所となったのである。

1935年時点のサカーキーニーもまた、いまや領域として実体をもつパレスチナをとくに「ワタン」と呼ぶことはしていない。だがコスモポリタンの志向をもち、既述したように「異邦人として」パレスチナに生きていた彼が上述のような経過を経てこの地のかげがえなさを見出し、ここに住み続ける条件を固めてゆく過程で、パレスチナがついに彼のワタンになっていたと読みとることは決して強引ではあるまい。

VI. 〈他者〉への無関心の装い

サカーキーニーはまた、こうした家族旅行の中でユダヤ人社会を目撃した。上述の1932年の初めての家族旅行のさいにサマフ¹⁶での学校視察を終えると、この地にある「ユダヤ人集団入植地」に向かったのである。だが木陰で昼食を食べたという以外の具体的記述はなく、「私ももしユダヤ人を憎んでいなければこの入植地に加わったことだろうが、

¹⁵ 当時のサカーキーニーは彼の同時代人と同様に、自分の出身地を「シリア」、同郷の人々を「シリア人」と表現しているが、彼が懐かしみ、帰国後にその地で暮らす具体的な場所は、エルサレムに他ならなかった。ニューヨークでのサカーキーニーについては、[田浪2017]。

¹⁶ ガリラヤ湖（タバリヤ湖）最南端の湖畔に広がる村で、ヒジャーズ鉄道のハイファ行き支線（マルジュ・イブン・アーメル鉄道）の駅もあった。1948年4月末、イスラエル国防軍の前身であるハガナーのゴラーニー部隊によって破壊された。

この集団生活のなかで暮らしたいと思うようなものは何もない」とだけ記す。この「入植地」はデガニヤ¹⁷だと思われるが、サカーキーニーは名称にさえ関心がないか、あるいはあえて記していない。仕事でサマフに出たついでに寄ってはみたものの、感情的な接点の一切存在しないことを確認したのだろう。

この旅でのユダヤ人への言及はこれが初めてである。しかしサカーキーニーが見落としていたのか、あるいは意図的に無視したのか、この旅でユダヤ人や彼らの入植地の存在を意識する機会は、潜在的には何度かあった。彼が気付いたかどうかは別として、ターブル山から見晴らした景観の中には、デガニヤをはじめとする入植地は視界に収まっていたはずだ。パレスチナの景観の〈ユダヤ化〉は、すでに進行していたのである。

本稿 3 節で、サカーキーニー一家がタバリヤ湖畔の温泉を利用したことに触れた。この地の温泉は 1912 年、バイルートの実業家がオスマン政府から開発の認可を得て設置されていたが、1925 年にユダヤ系企業が認可獲得の意思を示し、イギリス委任統治政府は先の認可を打ち切ってしまう [Norris 2011, 93-4]。ユダヤ人の患者たちのパレスチナ訪問を促進するため、特定の場所を治療施設として特化しようとする試みは、皮膚病やリューマチなどの慢性病に対する温泉療法に積極的なシオニストの医療関係者のあいだで、これ以前から始まっていた [Sufian 2007, 48-49]。サカーキーニー一家が温泉に浸かったのは、1932 年末にユダヤ系企業が新たに「ティベリア温泉」をオープンする直前のタイミングだったことになる。サカーキーニーたちが訪れたのは当時 3 箇所あった温泉施設¹⁸のいずれかになるが、もっとも古い施設を利用したのでなければ、そこにはユダヤ人客の姿もあったはずである。その後、新たにオープンした「ティベリア温泉」は、アラブ人利用者とユダヤ人利用者を利用時間で分けるべしとの提言がユダヤ人医師によってなされるなど [ibid., 50]、「シオニズムのプロジェクト」としての温泉は、その人種主義的側面を映し出す場でもあった。

サカーキーニーは 1935 年の「ハネムーン」から帰宅した直後の手紙のなかでも、シオニストの脅威に関する話題に触れつつも、「もういい、ともかく旅行は素晴らしく、有益

¹⁷ 1909 年、オスマン支配下のパレスチナで建設され、イスラエル最初の集団入植地とされる。ガリラヤ湖南端、サマフ村の西部に位置した。

¹⁸ 同時代に稼動していたのは、1833 年にイブラヒーム・パシャ治政下で作られたものと、その後オスマン治下でバイルートの実業家によって作られた 2 施設のようなものである。Sufian によれば、うち一つは第一次大戦中にドイツによって修復されたが、ヨーロッパから来たユダヤ人たちは、比較的新しい施設と修復された施設のみ利用していた。[Daily News Bulletin 1932/2/24] [Sufian 2007]

だった」と唐突にそれを打ち切る。その後、パレスチナ情勢が悪化し、全土にデモとストライキが吹き寄せるなか、サカーキーニーは自宅の建設へと猛進することになる。パレスチナの土地がシオニストたちに買われてゆくなか、土地を買い、家を建てるという個人的な営みはサカーキーニーにとって、壮大な愛国的企てにもつながってゆく。

計画のスタートから3年後に家はようやく完成し、サカーキーニー一家は1937年5月22日にカタモーン地区に移った。サカーキーニーにとってこの家は、自分の属する文化を体現する小宇宙であった。三方が通りに面したこの家を半島に見立て「島」と呼ぶことにし、それぞれの部屋にサナア、ダマスカス、コルドバ、バグダード、カイロといった都市の名をつけることにしたとサリーに報告する [YKS-6 1937/4/29, 370]。

「家、家、家、眼中にあるは我が家のみ。ご機嫌いかがと聞かれたら、我が家は大きなりと返事する。どこにおらんと問われれば、我が家にありと返事する」[ibid., 1937/5/25, 376]。息子への手紙のなかで、サカーキーニー自身が彼の建てた家についての噂話をする隣人たちについて言及しているくらいであるから、こうしたサカーキーニーの振る舞いに眉をひそめる人々も少なくなかったのだろう。だが、かつてパレスチナ社会に深い絶望を感じ移住を希求しながらも、最終的にこの社会で生きることを選び、子孫のための資産をこの地に残そうと決意したサカーキーニーにとって、そんなことはたいした問題ではなかったに違いない。

それから10年後、最愛の妻スルターナの病死の衝撃を乗り越えた70歳のサカーキーニーは、ユダヤ軍によるエルサレム攻撃をぎりぎりまで耐え、最終的にカタモーン地区が陥落する直前に辛うじて脱出しカイロに向かう。自分がパレスチナで死を迎えるのではなくカイロで客死することになることなど、そのときにはおよそ想像のつかない成り行きであった。

VII おわりに

「はじめに」で述べたように、本論考では、1930年代のハリール・サカーキーニーが息子にあてた手紙を題材に、パレスチナの中を歩き回った旅への言及に注目しながら、パレスチナが彼にとっての「ワタン」だと呼ぶうるものになった過程を追ってみた。それはパレスチナ情勢の変化とともに、サカーキーニー自身の生活環境の変化などさまざまな要因のなかで生じた複雑なプロセスである。テキストのなかから明示的に読み取るのは難しく、サカーキーニー自身がどれほど自覚していたかは知る由もないが、加齢に

よるサカーキーニーの身体の変化も、彼の心情に影響を与えたことだろう。

そのなかで比較的はっきりと読み取れるのが、パレスチナ北部の旅行を繰り返していたのと同時期のレバノンへの旅が、彼の「ワタン」観に何らかの影響をおよぼしたということである。それはすでに指摘したように、あたりまえのように捉えていた光景を賛美すべき美しいものとして「再発見」する契機をレバノン滞在のなかで得たことであった。二年後、パレスチナで土地を買おうと考え始めたサカーキーニーの意識下では、「神の創り給うたなかでもっとも美しい国」のなかの最良の部分に住んでいると自負しながらレバノンのザフラに居を構えるシャハーダ・シャハーダの暮らしぶりも、何らかの作用をおよぼしていたのかも知れない。

しかし、パレスチナは美しいばかりではなく、その土地が日毎にアラブ人の手から失われてゆくという不穏な社会的空気の中で、代替不可能な「かけがえのない」存在としても意識されるものだった。喪失の危機にある「かけがえのない」対象としてのパレスチナは、当然ながらすでに一つの領域として意識されたものでもある。1920年以降、イギリスが委任統治を開始した領域としてでなく、その地の住民が自らの運命を共にする場所に対する空間認識をもつ契機やプロセスは、集団的であるとときに固有の経験に支配されたものでもある。サカーキーニーにとってのパレスチナの領域認識については、稿を改めてさらに検討することとしたい。

参考文献

[一次資料]

[YKS]: 「ハリール・サカーキーニー日記」

مسلم كرم (تحرير). مركز خليل السكاكيني الثقافي.

———. 2003. يوميات خليل السكاكيني: يوميات, رسائل, تملّات. كلب الأول: نيويورك, سلطنة القدس. 1912-1907.

———. 2005. يوميات خليل السكاكيني: يوميات, رسائل, تملّات. كلب الرابع: الجزء الأول: بين الأب والابن, رسائل خليل إلى

سري في أمريكا, 1931-1932.

———. 2006. يوميات خليل السكاكيني: يوميات, رسائل, تملّات. كلب الخامس: الجزء الثاني: بين الأب والابن, رسائل خليل إلى سري في

أمريكا, 1933-1934.

———. 2006. يوميات خليل السكاكيني: يوميات, رسائل, تملّات. كلب السادس: الجزء الثالث: بين الأب والابن, رسائل خليل إلى سري في

أمريكا, 1935-1937.

جوهريّة, واصف. 2003. القدس الإثنيّة في المنكرات الجوهريّة, 1918-1948: لكتب الثاني من منكرات الموسيقي واصف

جوهريّة، مؤسسة الدراسات الفلسطينية.

زبدة نقولا، ثلاث جوازات سفر وأربع اجازات. [未刊行]

al-Sakakini, Hala. 1987. *Jerusalem and I: A Personal Record*. Jerusalem: Habesch.

[二次資料]

Manna', Adel. 2005. Between Jerusalem and Damascus: The End of Ottoman Rule as Seen by a Palestinian Modernist. in *Jerusalem Quarterly* 22/23.

Moed, Kamal. 2014. Educator in the Service of the Homeland: Khalil al-Sakakini's Conflicted Identities. in *Jerusalem Quarterly* 59.

Peled, M. 1982. "Annals of Doom: Palestine Literature —1917-1948". *Arabica*, T.29, Fasc. 2 (Jun 1982)

Sufian, Sandra M. 2007. *Healing the Land and the Nation: Malaria and the Zionist Project in Palestine, 1920-1947*. The University of Chicago Press.

Tamani, Salim. 2003. The Vagabond Café and Jerusalem's Prince of idleness. in *Jerusalem Quarterly* 19.

الصليبي، سمير. 2000. سوق الغرب في ذكرتي. دار المراد.

田浪亜央江 2017 「オスマン末期のパレスチナ人にとっての郷土／祖国 ——ハリール・サカーキーニーの日記を入りに」『アジア太平洋レビュー 2017』大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター、pp.68-80.